男の娘なIS操縦者

丈駄　春

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
男の娘なＩＳ操縦者

【Ｎコード】
Ｎ９１９３Ｚ

【作者名】
丈駄　春

【あらすじ】
時は西暦２０ＸＸ年
ＩＳと呼ばれる女性専用のマルチフォームスーツの登場により女尊男卑が強い世の中女よりも可愛らしい男の娘、柊　八千代ちゃんは織斑君の登場によりＩＳ適正値の検査を受けて高反応を出してしまうこうしてＩＳ学園に強制入学させられた彼が思うことは一体何なのか？
男の娘描写が薄いかもしれませんがなにとぞご許しを

またそういった描写が嫌いな方や原作キャラに思い入れが深い方は
多分嫌悪感がつよいと思うので見ないことを推奨します

第1話　『1年ぶりに再開した幼馴染が変態になっていた』

？？？ｓｉｄｅ

「ここがＩＳ学園か」

僕こと柊　八千代は女性しか動かせないマルチフォームスーツ『インフィニット・ストラトス』通称『ＩＳ』の操縦者を育成するＩＳ学園に来ていた

なぜ僕がこんな場所に居るかというと・・・

男性でもＩＳを動かせるという世界のパワーバランスを崩しかねないニュースをやっていた

せっかくだし、ＩＳ動かせるかもしれないと天然属性な母親に言われ、渋々ＩＳ適正値を測る政府研究機関に行って反応しなかった～という結果を持って帰るつもりだったのだがあろうことか適正値が高く実際にＩＳに触ると動いてしまったものだからそれはもう大変

二人目のＩＳ男性操縦者としてＩＳ学園に強制入学することになりました

という訳だ

しかしいざＩＳ学園に入ると視線が痛い

ＩＳを動かせる、男性なんてそうざらにはいない

周りの人たちが興味の対象になること間違え無い
ああ・・・どうしてこうなってしまったのだろうか
とにかく・・・もう一人の男性ＩＳ操縦者であり幼馴染である織斑
一夏にはやく合流せねばならない
そうと決まれば早く一組のクラスに向かおう
ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

一夏ｓｉｄｅ
・・・これは想像以上にキツイ
何がキツイかっていうと・・・女子の視線がキツイ
上野動物園のパンダの気持ちが分かる気がする
がらがら
教室の扉を開けて現れたのは、一人の男装した少女
茶味を帯びたポニーテルを揺らしながら俺の隣の席に座る
「・・・って八千代！？」
「ハロ～一夏、元気そうでなによりだ。入試でＩＳを動かしたみた

いだね」

「なんで・・・まさかお前女だったのか！」

「んな訳ないでしょうが！！！」

八千代は顔を赤くしながら机を叩く

「いい！一夏、この際だから言っておくけど、僕は正真正銘のお・と・こ！今度女の子扱いしたら、一夏の恥ずかしいエピソードをクラスメイトに言うからね！」

つーんとした顔になると、ひそひそ話が聞こえてくる

まったく変わらないな

女扱いされるとすぐ怒るクセ

「何か失礼なこと言ったでしょ」

変に勘がいいのも相変わらずだった

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

八千代　ｓｉｄｅ

全く・・・一夏は

相変わらず僕のコトを怒らすのが上手だった

『やっぱり女だったのか』

一夏の声を思い出す

やっぱりってなんなんだよ

やっぱりって

ああもう苛々するなぁ

・・・僕って女の子らしいのか

ええい！

こうなったら高校デビューしてやる！

そうと意思を硬く決めるとまた一人新たな人が入ってきた

なんか体つきは大人なのに顔だけ子供

子供が背伸びしているような人だなぁ

「みなさんこんにちは、私は副担任の山田　真耶です。よろしくお願いしますね」

にこり

と山田先生は笑ってはみるものの誰一人反応してくれない

やりにくい

じつにやりにくいだろう

だれかがやらないなら僕がやるぞ

「よ、よろしくおねがいします」

「あ、いえこちらこそ」

なんで教師が生徒に頭を下げているんだよぉー

内心ツッコミを思っていると

山田先生は出席簿を開いて、

「そ、それじゃあ～自己紹介でもしてもらおうかな～出席番号順で」

と言う

うん。定番だね

まず、名前に趣味、特技

って僕・・・趣味ないじゃん

落ち着け・・・落ち着くんだ

とりあえずなんか読書でもするって言っとけばいいや

しばらく自己紹介を進んでいくと、一夏の番になっていた

しかし一夏は反応もせずになにかに思い悩んでいるようだ

「織斑君、織斑君！織斑　一夏君！」

山田先生の呼び出しに答えた一夏は席から立ち上がった

「は、はい！」

「あ、あの大声だしちゃってごめんなさいね。今自己紹介しているんだけど『あ』から始まって『お』なんだよね自己紹介してくれるかな？駄目かな？」

「します！しますからそんなに謝らないでください。えー織斑　一夏ですよろしくお願いします」

そのまま周囲の様子を見渡すようにチラリと見る

（何だよ、その『それだけで終わりじゃないよね』な視線はええい南無三）

すーはー

という深呼吸の後

クラスメイトの関心は一夏に集まる

「そこにいる八千代は俺の嫁だ！」

スパァン

二つの物理的な干渉の衝撃音が一夏の頭に響く

一つは黒スーツを着た
一夏のお姉さん
織斑　千冬による出席簿アタック

そしてもう一つはに束さんにもらった特製のハリセンによる僕の攻撃だ

「い～ち～か～君、誰が嫁だって～」

「いや・・・場を和ますためにもひつようだと思ったんだって！」

「そんな場の和ませ方があるか！あってたまるか！」

「柊落ち着け」

千冬さんに言われて頭に上っていた血が戻る

「すみません、自己紹介を邪魔しました」

「あ、そういえば～織斑先生、もう会議は終えられたのですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶、押し付けてしまってすまなかったな」

千冬さん教卓の前に立ち、自身の自己紹介を始める

「諸君！私が君たちの担任を勤める織斑　千冬だ君たち新人を一年で使い物にするのが私の仕事だいいか私の言うことには『はい』と返事をしろ、よくなくても返事をしろいいな？」

なんという無茶振り

これが千冬さんの教育方針なのかと驚きを隠せずにいられないと・・・

クラス中から

『キャアアアアアアアアアアアアアアアア』

という黄色い叫び声が教室中から外へ響いた

「千冬様！本物の千冬様よ！」

「私、お姉さまのファンなんです！」

「わ、私はお姉さまに憧れてこの学園に来たのよ！北九州から」

「私、お姉さまのためなら死ねます」

いろいろツッコミ所は満足な箇所で置かれている

千冬さんを見てみるとやれやれと頭に手を置いていた

「まったく、毎年よくこれだけ馬鹿者が集まるものだ・・・あれか、私のクラスにだけ置いているのか？」

彼女がため息をつくとクラスは益々ヒートアップしていた

「もっと叱って罵って！」

「でも時には優しくして！」

「そしてつけあがらないように躾をしてぇ～」

きっと彼女たちはもう手遅れなのだろう

僕は彼女たちから目を逸らして空を見つめる

ああ、空はなんでこんなに青いんだろう

第2話　『生徒会長と出会った』

八千代ｓｉｄｅ

クラスの自己紹介が終了して一夏は誰かに拉致られたようだ

そして僕も見知らぬ女性に拉致られた

しかし僕は彼女の事を知っている

別に遠い親戚だとかそんなに深く知っているわけではなくこの学園の生徒会長として知っているだけだ

「突然連れ出してごめんね。私は生徒会長の更識　楯無っていうのよろしくね」

「はぁ・・・」

実は知っているんだけどなぁ・・・と思いつつ曖昧な返事を返す

なんとなく思う

この人は母さんと一緒な気がする

強引でわがままな母さんと

そしてこの豪華そうな一室に連れてきたのもまたなにか理由があるのかもしれない

「それでね。早速本題に入るけど・・・生徒会に入ってみない？」

空を見つめる

ああ雲が白いなぁ

「って生徒会！？そういうのって責任がある人に任せたほうがいいんじゃないですか！？」

「此処の生徒会は特別なのよ。生徒会長の承認さえあれば、生徒会に入れさせることができるのよ」

「うーん・・・ですが僕を生徒会に入れてメリットがあるんですか？」

「そりゃもちろん！まず第一に、男が居るだけで生徒の関心は上がっていくものよ。それに私自身もあなたに関心があったから♪」

「そりゃまたなんで？同じ男なら一夏の方がいいでしょ？」

「そうでもないわよ。あなたは見るからに人畜無害にみえるしそれに美千代さんの息子さんだしね」

「母さんと知り合いなんですか？」

「知り合いもなにも・・・美千代さんは元ロシア代表で、かのブリュンヒルデ　織斑　千冬と肩を並べられるくらい強かったのよ？ロシア代表ならこれぐらい知っていて当たり前よ」

知らなかった

母さんが世界最強と同じぐらい強いだなんて

だっていつもは駄目駄目で料理もしなくて洗濯もしない専業主婦で
いつもベタベタしてくる人なのに

なんか思っていて残念だよな

でもなんでＩＳをやめたんだろ？

かなり強いのに

「まぁ、美千代さんにもいろいろあったらしいしやめた原因までは
知らないけどね。それで生徒会に入る？入らない」

「う～ん、今のところやめておきますよ。広告みたいな感じで入る
のは他の方にも失礼でしょうから」

「そう・・・なら仕方が無いわね、気が変わったらまた来てね」

僕は更識さんにぺこりと頭をさげ元の教室にもどっていった

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

楯無ｓｉｄｅ

柊　美千代・・・

かのブリュンヒルデと並び立てる唯一の人間

そしてその息子に『生徒会に入らない？』といった感じで誘いをかけてみたが失敗に終わった

でも私は諦めるつもりはない

一年ちょっと

美千代に鍛えてもらえたが当時どの訓練官よりも無茶苦茶で上下関係が成っていなかった環境でロシアの代表操縦者になれるとは思ってもいなかった

やることは毎日遊んだり、お茶飲んだり買い物したり・・・まぁごく稀にＩＳに乗ったぐらい

ＩＳの操縦時間なんて１０時間いかないぐらい

そんなんでＩＳ操縦時間を１００時間越えしている代表候補生と対決することになった

「あんたも大変ねぇ、あんな世間知らずに付き合わされて・・・ＩＳの操縦時間何分よ？」

その時いろんな物がぶちぎれた

確かに美千代さんは世間知らずだ

雪が降ってきた日には

「ねぇ楯無～雪合戦しよ～雪合戦」とのんきに遊んでいたりたまにまじめに訓練するかと思ったら訳の分からない動作の練習

美千代に最後まで付き合ったら相手の選手の動きが全て単調に思えた

その次もその次も・・・

なんど相手をしても全て単調

そして全ての相手を勝利した私はこうして国家代表ＩＳ操縦者になり美千代さんは日本に帰国した

やはり美千代さんは強い

そしてその息子である八千代君も磨けば輝くことができるのではないのだろうか？

押し付けかもしれないが恩を返すため・・・それと同時に美千代さんとはまったく違う性格の彼に興味を惹かれていたことにまだ私は気がつかなかった

第2話　『生徒会長と出会った』（後書き）

とりあえず生徒会長出してみました

箒さんのルートは一夏君に回収させるという意味で・・・

第3話　『英国淑女と決闘する事になった』（前書き）

書いていくうちにセシリアが酷くなってしまった

ではどうぞ

第3話　『英国淑女と決闘する事になった』

一夏ｓｉｄｅ

まずい・・・
すげーまずい・・・

授業がぜんぜんわかんねぇ・・・

なんで・・・なんでだ？

となりの八千代を見てみる
丸い瞳にやわらかそうなほっぺ・・・ってそうじゃねぇだろ！

「八千代」

こっそりと小声で八千代の事を呼びかける

「ん？」

「お前もしかして・・・これ分かるのか？」

「全部とはいかなくても６，７割ぐらいは分かるよ」

まじかよ・・・じーざす

「もしかして一夏、分からない？」

「ああこの広域なんたらとかパッシブなんたらとか訳がわかんねぇ」

「おい、織斑　柊」

こそこそと会話している最中

上から見上げるようにそしてえ低い声が僕たちに襲い掛かった

「授業中に私語とは恐れいる・・・おい織斑！ＰＩＣについて説明して見せろ」

「わ、わかりません」

スパァン

千冬ねぇの出席簿に俺は頭を叩かれた

「柊　ハイパーセンサーについて説明してみろ」

「えっと・・・操縦者の知覚を強化して目視で確認できないものを確認して見せたり、視覚外のものを見ることが出来たりするもので・・・あっていますよね？」

おおすげぇ

あの千冬ねぇの難題をクリアした

「ああ、この二つは入学前の参考資料に載っているものだ・・・柊はともかく、織斑は入学前の参考資料をどうした？」

「古い電話帳と間違えて捨てました」

スパァン

また俺の脳細胞は死んだ

今日一日でいったいどのくらい死んだのだろうか

少なくとも２０００体は死んだ

「再発行してやるから1週間で覚えろ」

「いや！あの厚さで1週間は」

ギロリと千冬ねえに睨みつけられて

「やれといっている」

俺は大人しく

「はいやります」

とこたえるしかなかったのであった

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

八千代ｓｉｄｅ

前の授業で怒られた一夏を慰めていると

「ちょっとよろしくて？」

と金髪の髪の毛に青い瞳の人形のような少女が僕たちに近寄ってきた

よろしくありません

とか言ったらなんかあるんでしょうなぁ・・・

「はい大丈夫です。イギリスの代表候補生にして優雅で可憐でオルコット家を若くして継いだああセシリア・オルコットさん」

「ま・・・それほどでもありませんわ」

内心思う

オルコットさんはちょろいな

「なぁなぁ八千代」

今度は一夏が話しかけてきた

「ん？何一夏？」

「代表候補生って何だ？」

その反応にクラスメイトのほとんどがずっこけ、またセシリアもぴくぴくとしていた

「あなた！本気で言ってますの！？常識ですわよ！常識」

「常識って言われても知らないものは知らないんだ。で八千代『代表候補生』ってなんなんだ？」

「まー国から選抜された操縦者だよ。早い話がＩＳ操縦者のエリート」

「そう！エリートなのですわ！」

しばらく黙っていたオルコットさんが突如叫んだ

「そしてそのエリートという選ばれた私と同じクラスになれて貴方達は今奇跡いえ・・・幸運なのよ、その現実をもう少し理解していただけるかしら？」

「幸運ですか」

はは～ありがたき幸せにございます～

とでも言えばいいのか？

あほらし・・・

「そうかそれはラッキーだ」

「馬鹿にしてますの？」

「お前が幸運だって言ったからだろ」

「もう一人のほうはある程度できるみたいですがあなたはＩＳについて何も知らないのによくこの学園に来れましたわよね。男で唯一ＩＳを動かせると聞いて知的さを期待しましたのに」

「俺に何かを期待されても困るんだが」

そんな一夏の呟きを無視するようにオルコットさんは発言を続ける

「まぁでも私は優秀ですから貴方のような人間にも優しくしてあげますわよ、ＩＳで分からないことがあれがまぁ・・・泣いて頼まれたら教えてあげてもよくてよ。何せ私、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

しかし一夏がオルコットさんの発言を取り下げるように言葉を発する

「俺も倒したぞ？教官」

「は？」

「私の聞いた話では私だけのはずですわ」

「それ女子の中ではっていうオチじゃないか？」

「貴方！私を侮辱いたしますの！」

オルコットさんは顔を真っ赤にし机を叩く

机ェ

「まぁまぁ落ち着いてください。オルコットさんこの話の続きはまた今度にすればいいじゃないですか」

本音はこれ以上この人に付き合いたくないというのもあるけれど

予鈴も鳴っているのでこれ以上の話は無理だと踏んだ

オルコットさんも理解したようで

「話はまた後で！逃げなくてよ！」

一体何処に逃げるんですかと思いながら僕は席に着いた

席に着くと千冬さんが前に出ている

どうやら千冬さんが授業を担当するようだ

「では装備の特性についての授業を開始する・・・とその前に再来週行われるクラス対抗戦に出るクラス代表を決めなければいけなかったな。クラス代表とはクラスの代表となるものだ。クラスの代表となる以上そのクラスの実力にもなってくる、また委員会等にも出席してもらう。自薦他薦は問わない誰かいないか？」

面倒なので僕は手をあげないことにした

目立つのも嫌だし、そういった雑務を押し付けられるのも面倒だからね

「はい、私は織斑君を推薦します」

「私もそれがいいと思います」

「それじゃあ私は柊君を推薦しま～す」

「はぁ！？俺！？」

「え、僕！？」

勝手に決められるとはなんという横暴
文句の一つでも言おうと立ち上がるとオルコットさんの怒声が聞こえた

「納得がいきません！」

「そのような選出は認められませんわ！大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！そのような屈辱に一年間耐えろと申されますの！？大体文化として後進的な国で暮らす事も私にとっては耐え難い屈辱で・・・」

「言いたいことはそれだけですか？セシリア・オルコットさん」

ぷちん

頭のどこかからそんな声が聞こえた

「どんだけ自分の国を自慢したいんですか？世界一マズメシで何年やってるくにが文化で先進的、ハッ！笑わせてくれるねぇ」

「おいしい料理は他にもありますわよ！あなた私の祖国を侮辱しますの！？」

「そっちから侮辱してきたから同じことしただけですよ？それに本当の事じゃないですか？」

「・・・ぐ、なら決闘ですわ！どちらが優劣すぐれているか分からせてあげますわ！」

「面白いね・・・と言いたい所だけど、そういう行動は母さんにきんしされているんだ」

「あら、逃げますの？顔も女っぽくて性格も女々しいのですね」

「そこまで言うことはないだろう！」

会話を取られた一夏が急に割り込んできた

そんな一夏を僕は止めた

一夏とセシリアさんの前に出て僕は言葉を発する

「それじゃあこうしない僕とオルコットさんと一夏でクラス代表の座を賭けて勝負しよう。クラス代表も決めらるし・・・それでいい？オルコットさん？」

「ええ、よくてよ。わざと負けたら小間使い・・・いえ奴隷にしますわよ」

「ＯＫ分かったよ！僕も持てる力全てを使ってオルコットさんに勝ちに行くからね！」

千冬は手を叩き場の騒動を鎮める

「話はまとまったようだな勝負は次の月曜日！第３アリーナで行う、織斑、柊、オルコットは準備をしておくように」

こうして僕はオルコットさんと勝負することになったのであった

第3話　『英国淑女と決闘する事になった』（後書き）

次回は寮部屋イベント

一応『あの人』と絡ませるつもり

第４話　『ルームメイトは生徒会長』

八千代ｓｉｄｅ

オルコットさんの決闘宣言から何時間か経ち僕と一夏は放課後一緒にＩＳの勉強していた

まだまだＩＳについて至らないところが多い中
ＩＳの勉強をしておくにこしたことはないと思い一夏と机を並べて学習している

そんな静寂を破ったのは一夏でもなく僕でもなく山田先生であった

「あ、よかったこんなところにいたんですね」

山田先生は僕たちに数字が書かれたメモを差し出す

この数字でいったいどうするんだ？

「えっとですね、お二人の寮の部屋が決まりました織斑君は１０２５室、柊君は２０３２室です」

「あれ・・・でも１週間は寮の部屋を使えないんじゃないですか？」

と一夏が質問する

「事情が事情なんで一時的に部屋割りを無理やり変更したようです・・・その辺、政府から聞いてませんか？」

政府か～
保護と監視
両一の目的を兼ねているのだろうどちらにせよ仕方が無いことだろう
「仕方が無いね・・・一夏、今日はこの辺にしておいて家に荷物を取りに行ったら？」
「そうだな、そうさせてもらうよ」
「それには及ばない、織斑の荷物なら私が選ばせて貰った」
「へぇそうなんですか」
「千冬ねえ・・・」
一夏は荷物を見てみると少し不服そうな顔してから千冬さんに出席簿で叩かれた
「織斑先生と呼べ。」
中を見てみると生活に最低限な物しかなかった
「えっとその・・・もっと生活には潤いがあってもいいと思います」
「着替えと生活電話の充電器さえあればいいだろ？他に用がないようだから私は戻る」
「じゃ、じゃあ・・・時間を見て部屋に戻ってくださいね。大浴場もありますけど柊君と織斑君は今のところ使えません」

「何でですか？」

「アホですか一夏は？いま大浴場を使っているのは誰ですか？」

「アホかお前は女子と一緒に風呂を入りたいのか？」

「いやどっちかというと八千代と一緒に・・・」

スパァンと隠し持っていたハリセンが現れ、一夏の頭を叩いた

「柊君、私たちはこれから会議に出なくてはいけないので」

「はい、失礼しました」

「いてて・・・」

僕は一夏を連れて教室を出て寮に向かった

「まったく、ちょっとしたジョークだっての」

「一夏が言うとジョークに聞こえないし、周りのふのつく女子がさけんでいたっての。じゃあまたね」

「ああまたな」

寮の階段の前で一夏と別れを告げると僕はメモに書かれた紙を見て部屋番号があっているかどうか確認した

この部屋であっていることを確認したらコンコンとノックをした

「は～いどうぞ♪」

どっかで聞いた事がある声がした

きっときのせいだと思い部屋を開けるとそこには更識さんがいた・・・

ギギギ

バタン

僕は無言で部屋を閉める

ふぅ・・・空が青いな

「ちょ、ちょっとまってよ八千代君！なんでドア閉めるのよ！」

「いやぁ・・・たまに現実から目を逸らしたくなることがあるんですよ」

「少年よこれが現実だ」

「・・・」

「あ、待って待ってよ！八千代ちゃん！お願いだから待って～」

「ちゃんはいりません！それと離してください！足にくっつかれると動けません」

その後、更識さんと一問答があって、結局僕は、更識さんのルーム

メイトになってしまうのであった

「そういえば本音から聞いたけど、イギリスの代表候補生と決闘することになったんだって？」

耳が早いなと思いつつ、「そうですよ」とぶっきらぼうに答える

僕は今、シャワールームに居て、更識さんは壁に寄りかかりながら立っている

シャワールームに立って自身の顔を見てみる

そこに美少女がいる

もちろんこの美少女は自分の顔でドキッとすることなんて今まで一度もない

多少ムッと思いシャワーを止めタオルで身体を拭き、寝巻きに着替える

「勝算はあるの？」

「当然ありません」

「え・・・その場のノリだとか？」

「まぁ、半分はノリですね、もう半分はきちんとした目的がありますよ」

「目的？」

「そうです。オルコットさんは僕から見て確かにいけ好かない人に見えます。自慢して、自分が選ばれた人種だと思い込んでいます」

シャワールームの扉をあけベッドに寄りかかる

「僕はその考えを改めてもらいたいそれだけです」

あーもー何、楯無先輩にいってるんだろ

恥ずかしい

「あーやっぱ無し！今のはただの戯言、この話は無かった事にしてください」

「ふふ、そこまで言われちゃこっちだって引き下がるわけにはいかないわ、私も生徒会長として、更識　楯無、個人として協力するわ！」

「楯無先輩・・・」

「それに・・・なんでもないわ。一年の寮長は織斑先生だから早く行動するためにも、今日はもう寝ましょう」

「そうですね」

僕はベッドに入り目を閉じることにしたのであった

第5話　『決闘！英国代表候補生』（前書き）

あけましておめでとうございます
今年もよろしくおねがいします

第5話　『決闘！英国代表候補生』

八千代ｓｉｄｅ

楯無先輩に特訓させられオルコットさんと決闘の日を迎えた今日

僕と一夏とオルコットさんは別々のピットにいた

「とうとうこの日が来たわね」

楯無さんの様子を見てみるに扇子を口元に隠しながらモニターに映っているオルコットさんの『ブルーティアーズ』を見ていた

「遠距離狙撃型のブルーティアーズ・・・確か、新型の無線誘導システムを使ってるんですよね」

「ええ、それにしても遅いですね専用機」

『柊』

噂をしていると天井のスピーカーから千冬さんの声が聞こえる

『まず、お前の方からやってもらう。今そちらに専用機を送った、初期化と最適化は実戦で行え』

うぇ厳しいなぁと思いながらベルトコンベアーで運ばれた一体の機体が指定の位置まで運ばれていく

それは白かった

一個の重々とした銃に背中から身体を覆うように生えている白い翼のような機体

『これが貴様の専用機”白雪”だ』

さっそく初期化と最適化を済ませようと下に着てあるＩＳスーツに着替える

「う～んなんか、エロいわね～そのＩＳスーツ」

今来ているＩＳスーツは上半身と下半身に分かれているタイプで腹の部分がまるっきり露出していた

まぁ確かに
家で腹出して寝ていたら妹にも「何エロい格好で寝てるのよ！もう少し恥じらいを持ちなさい」
とか言われたしな

「馬鹿なこと言ってないでさっさとＩＳに乗りましょう」

初めてＩＳに乗ったときのようにトンと寄りかかるとカチャカチャという音がして、視覚外まで見えるような感じがした

「それじゃあ、行ってきます！」

白雪は宙に浮いてそのまま全力で加速してアリーナの中央に向かう

「あらあら、尻尾を巻いて逃げたかとお思いですのに・・・その誠意に答えて私も最後のチャンスをあげますわ」

「チャンスねぇ・・・一応聞いてあげますよ」

「いくら専用機を持っていようが私が勝つのは当然の結果、今ここで謝るなら許してあげてもよくてよ」

背中にくっついていた銃が反転しそれをもつと連結部分が離れる

「答えはノーだ！」

「そうですの、それならお別れですわね！」

セシリアと僕は銃を構える

両方の銃口から光が出てくるそれを両者受けてしまった

「うわぁ」

「クッ！なかなかやりますわね」

互いがバランスを崩した

オルコットさんは空中でもう一度回転し落下は免れたが僕は地面に落下した

次の射撃を回避するためにすぐに起き上がり射撃を次々と回避する

オルコットさんに背を向けていたがぐるりと反転してから射撃の雨を身体を回転しながらよけ、また大円をえがくように背後を取っては回られてまた射撃の雨が降り注ぐ

これでは劣勢だ

その劣勢を返すために一気に加速をして距離を飛ばすとオルコットの頭上をとった

迷い無くトリガーを引くと銃口からのビームにオルコットは直撃した

「きゃあ！・・・なかなかやりますわね！」

一応バカみたいな父親にこの手の類は教わっていたからな

強盗ぐらいだったら相手できるわ

「ではいきなさい！ブルーティアーズ」

ビットが四本飛んで追いつめるようにビームが飛んでくる

空中では何発か食らってしまい地面に落ち、頭上からブルーティアーズの射撃が飛んでくる

「やられてたまるかぁ！」

ぐっと歯を噛み締め回転を行い、ビットの射撃直線状に立ちトリガーを引くと来たビットは当たり、落ちていった

「なぁ・・・！めちゃくちゃですわ！」

少し読めてきた

このビット真っ直ぐにしか飛べない
避ける事を犠牲にさえすれば簡単に打ち落とすことができる
さらにこっちのビームは相手のビームより太く当たりやすい特性がある
「次！」
逃げるように地面を走っているとビットが追い詰めるように展開される
釣れた
僕は射撃線上にあるビットを打ち落とす
「それじゃあ、こっから挽回だ！」

side out

セシリアside

素人には思えなかった
男には見えない風貌をしている柊　八千代という男はあろうことか
我が祖国を侮辱した

少し懲らしめればすぐに謝ってくるだろうと思っていたが実際は違っていた

形など作られていない撃ち方で私を追い詰めていく

私はエリート

ＩＳの操縦時間も３００時間を越えておりそこらのただの男性に負けるはずなんてない！

「まいった」

ブルーティアーズも４機落とされ私のエネルギーも９割方消費したところで主砲を背中から伸びている連結部分に挿すと主砲は半回転し背中に収納された

「まいったですって！今更そんなことが言えますの！」

「そんなこと言ったってこれ以上はやる意味ないでしょ？」

「いいえ！まだ出来ますわ！」

「セシリア、ごめん」

彼のほうから謝ってきた

「今まで国のこと馬鹿にしてごめん」

「い、いえ・・・」

改めて考え直してみると自分のほうが悪い

「わ、私の方こそ、今まで貴国のことを侮辱の発言取り消しますわ。そのすみませんでした。」

私は誠意をこめて謝ると、彼はピットに逃げ帰るように背を向ける

「あ、そうそう。一個つけくわえ」

「なんですの？」

「別に無理にエリートにならなくてもいいんじゃない？オルコットさんはオルコットさんなんだから」

そう言い捨てると彼は逃げるようにピットに向かい、空中で回転を加えると手を振りピットの中に帰っていった

第5話　『決闘！英国代表候補生』（後書き）

ファースト・シフトはカットします
試合を見ている最中終わったと考えてもらってください

第6話　『敗北者達よようこそ』

八千代ｓｉｄｅ

僕は初期化と最適化を終えると、白雪は待機状態の腕輪になったので、とりあえず腕につけ一夏のほうのピットに向かった

『俺は世界で最高の姉さんを持ったよ。でもいつまでも守られているわけにはいかない。まずは千冬ねえの名前を守るさ』

篠ノ乃　箒さんだっただろうか？

彼の発言をぼぉーと顔を真っ赤に成りながら一夏を見ている

ああこの子は一夏のことが好きなんだ

あの朴念仁のことだからどうせ気づいていないことだと思ってため息をついていた

『勝者　セシリア・オルコット』

百式の初期化と最適化が終わり、第一形態移行になり、武装が近接ブレードから雪片弐型に変わると真っ直ぐ撃ってくるミサイルを切り落としオルコットさんに向かって雪片弐型が当りそうなところであと一歩、試合終了になった

その後一夏が帰ってきた

「おつかれ一夏」

「おう八千代」

「よくもまぁ・・・あれだけ持ち上げておいて、負けておいてくれたなこの馬鹿者め、武器の特性を理解しないからこうなる」

「武器の特性？」

「一夏の武器『雪片弐型』には自己のシールドエネルギーを使ってまで、攻撃できる機能があるんだ。」

「そうか・・・それを使って俺負けたんだ。ってか八千代はどうなんだよあんな事言っていたわりには負けたじゃねーか」

「一夏が勝つって思ったのと、今のオルコットさんに勝ってもぜんぜん嬉しくないからだよ」

「は、手加減でもしてたのかよ？」

「油断はしてたと思うよ、油断されるような状況で戦って勝っても、嬉しくもなんともないからね、だから負けた」

「本音は？」

「クラス代表が面倒だから辞退しました」

おっといけない。
つい本音が出た

それにしてもさっき横から質問したのってまさか

・・・

思い当たるフシが僕の頭に出席簿が当たる

「ふん馬鹿者め。おい織斑、これからは、暇さえあればＩＳを起動しておけ、柊は織斑に対射撃戦闘の訓練でも教えてやれ」

「「はい織斑先生」」

僕はそう返事をすると先に部屋に戻ることにした

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

セシリアｓｉｄｅ

私は今、シャワーを浴びていた

そのときふいに彼の名を呟く

「柊　八千代・・・」

誠に男性かと思うほど綺麗で優雅で、凛としていて、私のことを見ていたお方

その正体はセカンド・ブリュンヒルデといわれたロシアの元代表性

柊　美千代様とそっくりの面影であった

ああ、この胸の高鳴り、真っ赤な顔

間違えない、私はあのかたに恋をしているのだ

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

八千代ｓｉｄｅ

「あ～疲れた」

僕は自室に戻るとそこには楯無さんがいた

「やっほ～八千代ちゃん、ごはんにする？お風呂にする？それとも わ・た・し？」

「いろいろ言いたいことはあるのですが、なぜ会長は裸にエプロン一枚しか着ていないのですか？それとも露出癖のある変態なんですか？そうですか、そうですよねしばらく外に出ているんで早く着替えてください」

（死んだ魚のような目だったわ）

僕は何も感じずそう言い残して１０分後再び部屋に入った

よかった・・・今度はまともな格好だった

「それじゃあ負けた理由を聞かせてもらいましょうか」

「ええ、僕は最初勝つことが目的ではないと伝えました。まぁ～ビット４機、破壊している最中オルコットさんの苦悩みたいなことが聞こえてきたんでそこらへんでやめておきました。謝ったときちゃ

んと返ってきたんで大丈夫だと思いました」

「うむ。そういうことならよろしい。それで八千代君には紹介したい子がいるんだけど・・・」

楯無さんがなにか言いかけるとコンコンとドアをノックする音が聞こえた

「失礼します」

「失礼しま～す」

キリッとした声と、ゆるゆるな声が聞こえた

「はい、開いてますから、勝手に入ってください」

がちゃりと扉を開けると、メガネをかけた、凄腕秘書みたいな人と、大きめな制服をだぼだぼに着ている人がいた

「紹介するわ。生徒会会計の布仏（のほとけ）　虚（うつほ）ちゃん」

「虚です、よろしくお願いします」

メガネをかけた人が頭を下げたので僕も頭をさげた

「あ、どうもご丁寧に」

「それでこっちが虚ちゃんの妹の本音ちゃん」

「よろしくやっちー♪」

「やっちー！？あ、八千代だからやっちーね」

僕は理解していると楯無先輩はパンパンと手を叩く

「これから、八千代君は生徒会の副会長に就任してもらうわ」

「はぁ！？聞いてないんですけど！」

「そりゃそうよ、今初めて言ったんだから♪」

「せめて就任の理由を聞かせていただけませんか！」

「いい？今回、八千代君はだれよりもオルコットさんの為に動いたわ、次の試合も考慮していたしね。ＩＳ学園は特殊な選抜方法で生徒会長を選抜しているから慢心や、そういったいろんな物に絡まれているのよ。だから今まで、他の人の為に動ける人を探していたの・・・どう？やってもらえる？」

「はぁ・・・しょうがないですね」

僕はためいきをつきながら条件を提示した

「一つだけ条件があります。」

「条件？もしかして私のカ・ラ・ダ」

僕はグーで楯無先輩の頭を叩く

「次、冗談を言ったら部屋から出て行きますよ会長♪」

「イ、イエッサー」

「僕はまぁ人の前に出ることはそんなに好きじゃありませんので下っ端の下っ端、つまり『庶務』の役職ならやりますよ」

きっと僕の顔は赤くなっているのだろうと思いながら僕は結局は生徒会に入ることにした、きっと僕は『お人よし』の部類に入るのだろう

第7話　『平凡淡々たる日常』

八千代ｓｉｄｅ

僕は今、虚先輩と一緒に馬鹿みたいな書類の山を片付けていた

『庶務』

という役割を貰った僕は会長も本音さん・・・訂正のほほんさんがいない間に雑務の山を片付けていた

「驚かれましたか？」

急に声をかけられて少しびっくりしたが、僕は無言でうなずいた

「そうでしょう・・・しかし八千代くんも災難でしたね」

「え、何が？」

「お嬢様に目をつけられたことです。」

「あはは・・・それについてはなんとも、まぁノーコメントの方向で行きましょう、家族にああいう引っ張っていくような人がいますからね、そういう時はあきらめて流れに任せるほうがいいことがあります」

なぜだろう。

悲しくないのに涙が出るんだ

「そうですか・・・そろそろ授業の時間ですね」

「あ、着替える時間もあるので、先に行ってますね」

「実習の時間ですか」

僕は虚先輩に後の作業を任せると、生徒会室から出て行った

僕は一夏と一緒にＩＳスーツを着て、アリーナに集合して、織斑先生がグラウンドの中心にいた

「ではこれより、ＩＳの基本的な飛行訓練を実施してもらう。柊、織斑、オルコット、試しに飛んでみろ」

「はい！」

僕は隊列から離れると目を閉じ意識を腕輪に集中させた

（白雪！）

僕の身体に瞬時にＩＳが装着された

「よし！飛べ」

「「はい」」

僕とオルコットさんは返事をすると勢いよく地面から離れた

上昇を続けつつもくるりと回転をして地面を見下ろす

おー高い高い

と変な感想を抱いていると、急にオルコットさんの声が聞こえてきた

どうやら、プライベートチャンネルとかいうやつでこちらに話をしているらしい

『さすがですわね。とても先日始めたばかりには思えませんわ』

「買いかぶりすぎだよ」

「や、やっと追いついた」

『何をやっている、百式のスペックは白雪と同格、ブルーティアーズより上だぞ』

織斑先生は拡声機使ってこちらを見ている

「うう、そんなこと言ったって、どうやって飛んでいいかわからないんだよ。自分の前方に角錐があるイメージだっけ？」

「まぁ所詮はイメージってところだね、一番飛びやすい方法を探したほうがいいんじゃない？」

プライベートチャンネルからオープンチャンネルに切り換えるオルコットさんもオープンチャンネルに加わったようだ

「八千代さんの言うとおりですわ」

「そもそも、俺なんで浮いているかわからないんだよ、八千代はわ

かるか」

「ぜんぜん、オルコットさんなら詳しそうだよ」

僕はオルコットさんに話を振る

「構いませんが・・・、反重力力翼と、流動波干渉の話になりますから長いですわよ？」

「あ、やっぱ結構です」

今度はプライベートチャンネルでオルコットさんからの通信が来た

『それで・・・もしよろしければ、放課後、特訓に付きあってもよろしいでしょうか？』

『あー悪いけど今日は一夏に対射撃訓練してやんなきゃいけないんだよね』

『それでしたら、一夏さんの訓練、私も付きあってさしあげますわ』

『あーいいよ』

まぁしょうがないか

箒さんには悪いが、僕は了承の返事を返すことにした

そうやってプライベートチャンネルで会話していると下から箒さんが山田先生の拡声器を奪っていた

『一夏！柊！いつまでくっついている！早く降りてこい！』

どうやら箒さんは先ほど一夏にくっついていたのが気に入らなかった

『織斑、オルコット、柊、空中からの急降下をやってみせろ。目標は地面から十センチだ』

またまた織斑先生の指示を受けると僕たちは返事をした

「はい」

『それでは八千代さん、お先に』

「はい、いってらっしゃい」

オルコットさんは地面に降下していくと地表すれすれ、だいたい９，５センチぐらいで到着した

「それじゃあ次は僕だね一夏先行ってるよ」

「ああ」

おもいきり加速していく

５ｍ、４ｍ、３ｍとどんどん地表に近づいていき地表すれすれで身体を起こし横回転を加えながらとめた

「ふむ１０．５センチか、もう少しゆっくりやってみろそれと着地は普通にしろ」

「はい」

『柊～これどうやって止まるんだ！！！』

ちらりと上を見るとものすごい勢いで急降下している、一夏がいたってかこのままいけば僕と一夏はアリーナに穴をあけてしまうかもしれない

僕は背中に付いている白い羽状の盾『白羽（しらう）』を前方に展開させる

後ろにはだれもいない

白羽は一夏を受け止め殺しきれない衝撃が僕を押し出しズガリガリと地面を削っていった

「ふう止まった」

「何をしているこの馬鹿者、そしてよくやった柊」

「とゆうかどうして止まったの？」

「『白羽』の特性能力だ。白羽には対衝撃干渉防壁がある。それを使ってＩＳの直撃を防いだのだろう」

「ほぇ～便利だねぇ～」

クラスメイトの一人、というかのほほんさん（一夏が言っていたからあだ名みたいになった）に言われていた

「そうでもないよ、衝撃っていっても弾丸の直撃を受けれるだけで意識を集中させないと動けないし不意打ちの弾丸にはうんともすんともいわない。おまけにすべての衝撃を吸収できるわけではないから、爆発とかの衝撃は緩和するしかできないんだ」

「へぇ～」

織斑先生が手をたたく

「それでは近接武器の展開を練習して見せろ」

一番早く出せる武装『白突（しろつき）』を展開する

展開するとナイフが出てきた

近接というか一応投げる武器だけど

まぁいいかとおもいつつ、構える

メインの荷電粒子砲『白雷』に付いているミニ雪片弐型『雪火』は白雷が重いせいであまりうまく使えないしな

白雷の主砲→雪花で突撃→回避、距離をおかれる→また主砲のワンテンポだし

「ああ！もうインターセプター！」

オルコットさんは武器の名前を言うとショートブレードが出てくる

確か初心者向けのテクニックだっけ？

「遅い！試合相手にいつまで待ってもらうんだ？」

「し、試合では、間合いに入らせません！」

「ほう、織斑の試合ではいとも簡単に間合いに入られていたが？」

言い返せないオルコットさんにチャイムの音がなる

「よし！今日はここまで、解散！」

織斑先生の合図によって、今日の実習は終わったのであった

番外編　オリ主設定とオリ機体設定（前書き）

だいたい武装出たのでオリ主とオリ機体の紹介です。
一応ネタバレ要素が少し含まれている（かもしれないので）ので見なくても物語は楽しめます
オリ機体はWのゼロカスがモデルです。

番外編　オリ主設定とオリ機体設定

柊　八千代

セカンド・ブリュンヒルデ

柊　美千代の息子

目は丸く茶色の髪でポニーテルにしている

美千代の思いつきの行動でＩＳの適正値を測られた

その結果ＩＳを動かせることが判明し、ＩＳ学院に強制入学することになった

身長は１６０ｃｍ

顔は母親よりな為

女に間違われることもしばしばある

束との関係だが美千代が連れてきていつも通りに接していたら愛称でよばれるようになった

そのうち束との関係を外伝としてやるかもしれない

一夏との関係だが鈴が転入してきた後に父親の仕事の都合で転向し仲良くなった。

鈴とも仲がいい

サード幼馴染な状態

父親の仕事の関係で中２の夏にまた転校させられる

専用機

『白雪（しらゆき）』

百式のサポート機体でありつつも単独行動も可能にした機体
白い翼型の盾が身体を囲むように展開されている

・小型荷電粒子砲『百雷(びゃくらい)』
本体についている持ち運べる荷電粒子砲
出力によってアサルトやスナイプに変更できることが強みである、また銃の先端に展開装甲があり、バリア無効化能力が内蔵されているミニ雪片弐型、通称『雪火(せっか)』が内蔵されている

・対ＩＳ用近接武器『白突(しろつき)』
白雪が呼び出しが出来る唯一の武器
ナイフの形状をしているこれがささると機動出力に影響が出て次第に動けなくなる武器である

・対衝撃用物理シールド『白羽(しらう)』
白雪を囲っている物理シールド、本人が意思すれば２ｍまで伸びる
衝撃干渉機能、分かりやすく言えばガンダムＳＥ〇Ｄのフェイズシフトだが強すぎる衝撃は干渉しきれず、緩和が限界である

・単一仕様能力『全力射撃(フルブラスト)』
百雷へのシールドエネルギーを全てつぎ込むことができる能力
その破壊力は規格外なため、一撃でダメージレベルＤまで持っていく

第8話　『忍び寄る転校生』

八千代ｓｉｄｅ

放課後僕は一夏とＩＳで戦っていた

今まで接近戦だけだったので対射撃戦もやってみようと思った

だが、肝心のオルコットさんが来ないので僕は先に一夏と相手をしていた

『ほらほら！そんな真っ直ぐ動いていたら的にされるよ』

「ぐぅ、にゃろう・・・バカスカ撃ちやがって！」

一夏は雪片弐型を機動すると、こちらの射撃を突破しながら向かってくる

こちらも雪火を機動して真っ直ぐ突っ込む

『はい格闘！次射撃！』

一夏が距離を取ったので雪火を解除し元の主砲をばかすか撃ちまくる

（クソ！間合いに近づけば、あのミニ雪片くらうしかといって・・・間合いを開ければ射撃の餌食だ。ここは一つ賭けに出るか！）

一夏は真っ直ぐカクカクと曲がりながらこちらに近づいてくる

もう一度距離を取らせるため、雪火にモードを変え、突っ込む

「そこだぁ！」

一夏は突っ込みを回避して、僕に隙が出来た背中に思い切り振る

逆立ちするように突っ込んでいた身体は急停止をかけることで、反対になりその瞬間逃げるように加速を加え雪火から百雷にモードチェンジして主砲を弾道予測無しで撃つ

「うわぁ」

直撃をくらった一夏倒れこむように落ち、そこに瞬時加速を加え、さらにもう一度百雷の主砲をぶちこんでやった

その結果白式のエネルギーは０になった

「くそう・・・なにがいけなかったんだ？」

「雪片の長時間使用だよ」

「でも、雪片にはシールドエネルギーを無効化できるんだぜ！射撃を無効にすれば！」

「してもその分足止めをくらう、射撃している最中も足止めをくらって、エネルギーはどんどん減っていくよ？」

「な、ならどうすればいいんだよ！」

「一撃、射撃の中から一撃で決めてしまえば問題なしだ」
一夏はなるほど～と納得しているとオルコットさんがやってくる
「んじゃ今度はオルコットさんに相手をしてもらおうか。オルコットさんは一夏をＢＴ兵器だっけ？ともかくそのビットだけで一夏を近づかせないようにしてね、一夏は雪片弐型を使わずにやってみて」
「わかりましたの！」
「わかったやってみる」
一夏の相手をオルコットさんに任せると地面に降りて打鉄に乗っている、箒さんと向き合う
「準備ＯＫ？」
「ああ、いつでもかかってくるがいい！」
僕は雪火を展開すると銃剣のように持ち、箒さんにまず一撃右に振った
後ろによけられ、刀を銃で受ける
「いい反応だ！」
箒さんに褒められお互いが後ろにさがり、僕が突きを繰り出すと上にあげられる
距離が詰められると、主砲はあっさりあきらめ、白突を呼び出し刀

を受け止め、刀身の上を回転し地面に落下

そのまま瞬時加速で一気に近づき、ナイフで切りあげる

しかし・・・そこに箒さんの姿はなく、打鉄の近接ブレードがあり、
僕のシールドが削られる

やられた

読みが浅かった

僕は近接ブレードを持った箒さんにエネルギーをガリガリに削られ
たのであった

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

一人の少女がボストンバック片手にＩＳ学園の校門に立っていた

（ここが・・・ＩＳ学園、八千代は元気にしてるかしら）

その少女は一人の少年、柊　八千代を追ってきた

本来、ＩＳ学園なんて彼女にはなんの興味もなかったものである

彼女にとって八千代は、変われた存在であった

４年前、彼女　凰　鈴音はクラスメイトにありもしない因縁をつけ
られ階段で言い争っていた

そこに相手の女子がカッとなり彼女のことを押し出し・・・
彼女は２０段もある、階段に押し出された
彼女は目をつぶった
これから来るであろう衝撃に備えて心の準備を始める
５秒、１０秒・・・
いくら時間がたっても痛みは来ない
恐る恐る目を開いてみると、階段から柊　八千代が血を流していた
命の恩人である彼女は八千代に聞いてみた
「なんで・・・アンタ私のことを助けたのよ」
「別に、助けたかったら助けただけだよ。だから義理とかそういうのは感じなくていいよ」
にこりとほほ笑む
そのほほ笑みに彼女は恋に落ちてしまったのであったのだ
鈴はそんな彼に、早く会いたいと気持ちを急かしながら廊下を歩いていると一人の声が聞こえた
「・・・で、・・・だよね」

遠くて話の内容はよく聞こえないが男性にしては高く
女性にしては低い声の持ち主を鈴は知っていた

「やち」

「それで、・・・が・・・で」

「何それ」

（誰よアイツ！私の八千代に馴れ馴れしくしっちゃって！）

鈴は嫉妬した

本当はただのクラスメートでなんの関係でないただのクラスメートに嫉妬した

その後鈴は怒って受付まで行き、２組のクラス代表である少女をコテンパンにし、鈴は代表２組のクラス代表となった

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9193z/

男の娘なIS操縦者

2012年1月10日16時52分発行